

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520183

研究課題名(和文) 明治・大正の誕生期における大衆的言説のジェンダー構成に関する文学的研究

研究課題名(英文) A Literary Study of the Formation of Gender in the Infancy of Popular Discourse in the Meiji and Taisho Periods

研究代表者

石原 千秋 (ISHIHARA CHIAKI)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：00159758

研究成果の概要(和文)：明治・大正期に大衆に向けられた啓蒙的言説は現代にも引き継がれている。この研究では、その中でも父権制資本主義社会に特徴的な性差をめぐる言説を中心に上げ、これらが3つのレベルで機能していたことを明らかにした。第一は、男女の生物学的な性差について、進化論の影響を強く受けて男女の優劣を説くレベル。第二は、これを踏まえて社会の中での性役割を固定するレベル。第三は、女性不信パラダイムと呼んでもいいような、女性の心の理解の仕方のレベルである。文学が主にテーマ化したのは言うまでもなく第三のレベルである。このように、文学は社会構造全体と密接に関連していると言える。

研究成果の概要(英文)：The enlightenment-based discourses that were directed towards the masses in the Meiji (1868-1912) and Taisho (1912-1926) periods are still continuing today. In this research, I have focused mainly on the discourses concerning the characteristic differences between the sexes in the patriarchal capitalist society, and demonstrated that they functioned on three levels. The first level concerned the biological differences between men and women and, heavily influenced by the Theory of Evolution, argued for the superiority of men over women. The second level was based upon the first level, and aimed to fixed gender roles in society. The third level was concerned with trying to understand how women think, framed by what may be regarded as a "mistrust of females" paradigm. The third level obviously tended to be mostly adopted as a theme of literature. Thus it can be seen that literature is intimately linked with the structure of society as a whole.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：①近・現代文学、②大衆、③ジェンダー、④家庭、⑤進化論、⑥女性不信、⑦社会構造、⑧夏目漱石

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 私は、これまでに「大衆」を読者に持つことを仕事とした新聞小説である夏目漱石の文学が、「大衆」を読者としてどのように取り込んだのかを明らかにした（『漱石と三人の読者』講談社現代新書）。この研究によって、誕生期の「大衆」が現代の読者につながる「問題」として、本研究のきっかけとして「発見」できたのである。

(2) 次の段階として、明治・大正期における「大衆」の読み物であった雑書を、十数年の時間と一千万円以上の資金を使って二千冊以上収集し、その分析を試みた（『百年前の私たち 雑書からみる男と女』講談社現代新書）。

(3) その結果、この時代の「大衆的言説」の中心的な関心は、この世の中には男と女がいるという、いまでは当たり前すぎて忘れられてしまっている「問題」だということがわかった。これは当時の言い方では「両性問題」と言う。多くの言説が（たとえば「進化論」という一見「科学的」な言説までもが）この「両性問題」の圏内にある。

(4) 次なる課題としては、これら「両性問題」の圏内にある大衆的言説のジェンダー構成を構造的に明らかにし、面としての広がりや有機的な関連と厚みを持った立論を行う必要があると考えたのである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、誕生期にあった「大衆」に、ジェンダー構成に関するどのような言説が与えられていたのかを、雑誌、新聞、雑書を中心に分析することで、当時の大衆の心性と思想性が文学テキストに与えた影響を構造的に明らかにするところにある。

(1) 第一に、誕生期の大衆的言説がいかんにかんにかんによって構造化されていたのかを明らかにするところにある（知識人の言説におけるジェンダー構成の問題に関してならいわゆる「新しい女」を中心としたある程度研究成果があるので、それらを参照することは言うまでもない）。

(2) 第二に、大衆的言説のジェンダー構成によって、文学テキストがいわゆる「内面」を獲得していくプロセスと、その偏りを明らかにするところにある。

(3) 第三に、この25年間ほどの間に近代文学研究が育て、テキスト論者としての私が使い慣れてきた「読者論」の方法を、これまでほとんど見向きもされなかった当時の資料体を参照しながら導入することで（これが、本研究を「文学的研究」と呼ぶ理由であり、本研究の最終的な到達点である）、新しい「大衆という読者」の研究の基礎を固めるところにある。それは、文学研究を通じた、現代に生きる「私たち」大衆の研究だからでもある。

## 3. 研究の方法

研究の方法は単純である。明治・大正期の大衆的言説を雑誌、雑誌、新聞から収集し、それらを読むパラダイムをテキスト論的に析出し、そのパラダイムにとらわれた読者を想定し、その位置から明治・大正期の小説を分析することである。

## 4. 研究成果

成果の第1のレベルと第2のレベルは、社会科学の分野ではある程度共有されているので、ここでは本研究において中心的な第3の「女性不信パラダイム」について報告しておく。

『三四郎』（明治41年）は東京帝国大学を中心とした「本郷文化圏」を舞台としており、広い意味での学校小説だと言うことができる。当時の読者にとっては、主人公の小川三四郎に連れられて「本郷文化圏」を歩く、「本郷文化圏」案内小説といった意味合いも持っていたはずである。ここでは、三四郎がヒロイン美禰子に対して持った感じが、当時の近代日本の教養人に共有されていた「女性不信」とも言える感情と同じ質のものだったことを指摘しておきたい。

三四郎がはっきり美禰子に特別な感情を抱いたあとに再会した、病院の場면을引用する。

着物の色はなんと云うか分らない。大学の池の水へ、雲った常磐木の影が映る時の様である。それを鮮やかな縞が、上から下へ貫いている。そうしてその縞が貫ぬきながら波を打って、互に寄ったり離れたたり、重なって太くなったり、割れて二筋になつたりする。不規則だけれども乱れない上から三分一の所を、広い帯で横に仕切った。帯の感じには 暖味がある。黄を含んでいるためだろう。（中略）

肉は頬と云わず顎と云わずきちりと締まっている。骨の上に余ったものは沢山ない位である。それでいて、顔全体が柔かい。肉が柔かいのではない。骨そのものが 柔かい様に思われる。奥行の長い感じを起させる顔である。

ここはテキスト論的には、名古屋で不思議な女性と会って女性の恐ろしさを知った三四郎が、美禰子も不可解な女性として眺めている場面だと説明できそう。しかし、それだけだろうか。ここは三四郎視点からの記述だが、二つの特徴がある。

一つは、美禰子に関する記述が典型的ではないということである。これは、そもそも三四郎が「類型」を知らないことを読者に伝えるためになされた記述だからという事情も

あるが、そのために、事実として美禰子が類型化から免れたことは否定できない。もう一つは、三四郎視点から記述されたために、美禰子の「肉体」に読者の関心が集中するように書かれていることである。三四郎の視線は美禰子のセクシュアリティをこれだけ奪いながら、実際には肉体的な接触はほとんどないまま終わる。三四郎には、女性が恐ろしいのである。

やや無責任なジャーナリズムが垂れ流す女性に関する言説には慣れていても、典型的でない女性に触れることには多くの読者はまだ慣れていなかったのではないだろうか。現実問題としても、「女性」は明治になって男性的言説にとっての「他者」として「発見」されたと言っている面があった。そこで、女性論では早い時期の刊行に属するものの一つ、正岡藝陽『婦人の側面』（新声社、明治34年4月）を見ておきたい。この本には明治・大正期の女性の心に対する関心のあり方がすでによく表れているからである。正岡藝陽がまず述べることは、この世には「疑問」が多いがその「疑問中の一疑問たる女について」論じようという宣言である。そのはじめの一節を引いておく。

女は到底一箇のミステリーなり、其何れの方面より見るも女は矛盾の動物なり、されば古来未だ嘗て女に就て確固たる鐵案を下し不易の判決を与へたるものなし、嗚呼人類は到底不可思議なり、女は最も解し難きものなり。

「～の動物なり」という言い方は当時男女どちらにもよく行われたから、このレトリックが特別に差別的というわけではない。女性は「ミステリー」であり、「矛盾の動物」であって、とにかくわからないと頭を抱えているところが特徴的なのである。なぜわからないのだろうか。

男は直截なり、されど女は婉曲なり、男は直線なり、されど女は曲線なり、男は直行す、されど女は迂回す、男は素朴なり、されど女は仮装す、男は露出的なり、されど女は隠秘的なり、故に男は裸体的なり、されど女は正装的なり、裸体は正直を意味し、率直を意味し、自然を意味す、されど仮装は不正直を意味し、不自然を意味し、偽善を意味す。

要するに、女性がわからないのは、「女」が心を「正直」に外面に表さないからだと言うのである。本編では、結局は「余は終に女を究めんとし得ざりしなり」という結論に至っている。はじめから「女は矛盾の動物なり」と述べているのだから予測された結論と

言うべきだが、この本の趣旨が「女」には統一的な「自我」などないことを証明することにあることは明かである。別の言い方をすれば、「女」には男には解けない「謎」があるということになる。

とは言うものの、当時よく行われていたような「女性は虚栄心が強い」、「女性は嫉妬心が強い」という説明だけではあまりに殺伐としていたのだろう。そう考えた人たちがいたようで、そこで持ち出されたのが次のような説明の仕方だった。

女子から愛情を取り去れば其女子は既に女子たるの資格を失つたも同前です何となれば女子の此世に在つて為すべき事業の大半、寧ろ其全部は愛情から発するのであつて愛情以外に女子の為すべき仕事は殆んど発見することが出来ないと云つても宜しい程であるからです（池田常太郎『女子乃王国』東京堂、明治36年6月）

恋愛の情熱は男子も女子と同一にして厚薄の差あるに非ざれども、男子に於ては恋愛を以て素より一生の本領となさず、而して女子に在ては是れ実に其の生命なり 天賦なり、（菊池武徳『女性学』朝野通信社、明治39年9月）

愛情が女性の本質だということである。しかし、女性に恋の主体になられたのでは、男は「女の謎」に振り回されるばかりだ。そこで、結論はこういうところに落ち着くことになる。

女子は愛するよりも、多く愛せられるものなり、男は愛して幸福なり、女は愛されて幸福なり。これ愛に於て然るものなれども何れの場合に於ても女子は与ふるものにあらずして受くるものなり、これを書籍に就いて言はんか、男子は書くべきものなり、女子は読むべきものなり。（鈴木秋子『女子の見たる女子の本性』嵩山房、明治38年5月）

こうして女性を受け身の立場に封じ込めてしまえば、もう男が「女の謎」に振り回される心配はない。恋の主体は常に男だからである。しかし、そうなれば女性には女性の戦略が必要になった。と言うより、そういうポジションに押し込めたことが、むしろ男性にとって女性がわからない「謎」の存在となったのだろう。

当時発禁になった書物に、白雨樓主人（増田丘一）『きむすめ論』（神田書房、大正2年10月）がある。『きむすめ論』の内容は「現代女性論」とでも言うべきものであって、

シニカルな語り口にこの時期の「新しい女」に対する悪意を見て取ることができるが、「当局」が危険視するような記述は特にない。興味深いのは、『きむすめ論』でも結局は「処女は一種の謎なり」となることである。次の一節などは、たとえば美禰子の前に途方に暮れる三四郎にでも読ませてやりたかったと思う。

知り得たるが如くにして不可解なる者は処女の心理作用である、言はんと欲する能く言はざるものは処女の言語である、問へども晰かに語らざる者は処女の態度である、知つて而して知らずと謂ふものは処女である、想ふて而して語らざるものは処女の特性である、不言の中に多趣多様の意味を語るものは処女の長所である、小心なるが如くして比較的大胆なるものは処女である

例えば、東大構内の池の端ではじめて美禰子に出会った三四郎が口にしたのは「矛盾だ」という一言だった。この言葉は正岡藝陽『婦人の側面』の「女は矛盾の動物なり」という言葉と遠く響きあっている。「謎」「矛盾」といった漱石文学が女性について語る言葉の向こうには、こうした新しく発見された「他者」としての女性を読む「読者の期待の地平」が広がりはじめていたのではないだろうか。

もう一例だけ挙げておきたい。『こころ』（大正3年）の「先生」の遺書にこういう一節がある。「先生」が下宿先の奥さんがその娘と自分とを近づけようとしているのか警戒しているのかわからなくなったと書く、その後の記述である。

私は奥さんのこの態度のどっちが本場で、どっちが偽りだろうと推定しました。そうして判断に迷いました。ただ判断に迷うばかりでなく、何でそんな妙なことをするかその意味が私には呑み込めなかったのです。理由を考え出そうとしても、考え出せない私は、罪を女という一字になすりつけて我慢したこともあります。必竟女だからああなのだ、女というものはどうせ愚なものだ。私の考えは行き詰まれば何時でもここへ落ちてきました。（下十四章）

ここはテキスト論的には、血のつながった叔父に騙されて遺産を横領された「先生」が人間不信に陥り、奥さんまでもが信用できなくなったところだと説明できそうだ。しかし、それでは不十分ではないだろうか。「叔父に騙された→人間不信に陥った→女性も信頼できなくなった」とたどれば一見辻褃は合う。ところが、実際には「叔父に騙された→人間

不信に陥った→女性はバカだと思った」となっているからである。これでは辻褃が合わない。かりに同時代の読者にこの「先生」の思考回路が共感までは行かなくても、理解できたとしたら、それは同時代的なコンテキストが「女性不信」とか「女性蔑視」（ウーマン・ヘイティング）といったコードを共有していたからだろう。それは、先に引用した同時代の女性に関わる言説にまさにはっきり示されていたものである。

最後に重要な要因にふれておこう。漱石の書き残したものを参照する限り、小説を書く漱石は基本的には男性読者しか想定してはいなかったようだ。だから、こういう具合に書けたのかもしれない。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 石原千秋、佐々木雅撥、佐藤裕子、須藤武司漱石『こころ』を再読する（シンポジウム報告）、国文学・言語と文芸、審査なし、第127号、2011、pp.5-64

〔学会発表〕（計1件）

- ① 石原千秋、漱石の近代とテキスト論、世界日本語教育大会（日本文学部門・基調講演）、2010・8・1、台湾・国立政治大学

〔図書〕（計1件）

- ① 石原千秋、新潮選書、漱石はどう読まれてきたか、2010、367

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

石原 千秋 (ISHIHARA CHAKI)  
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授  
研究者番号：00159758